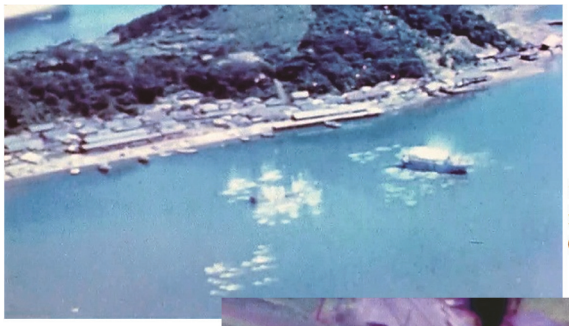
みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

# 『機銃掃射に怯えた日々 ～昭和20年宮崎の空の下で～』

連盟賞と芸術祭大賞W受賞を機に報道の基本について考察



外之浦港
船舶へ機銃掃射
(米軍機ガンカメラ映像)

機関車への機銃掃射
(米軍機ガンカメラ映像)

紫安(むらやす)　伸一　ＭＲＴ宮崎放送
シニアマネージャー（元報道制作局長）

## ●被災地で考えたこと

２０１６年４月25日午後、私は、震度７の本震から９日目を迎えた熊本県益城町の街路を放送作家の石井彰氏と歩いていた。

震災で立ち入り禁止となった益城町役場から、住民の避難所となった総合体育館までのおよそ１キロの街並みは、壊滅状態だった。火災こそ起きていなかったが、古い家並はほぼ全壊。寺院や神社も崩落していた。比較的新しい住居も隣の家の倒壊によるニ次被害を受けていた。

まるで町の中心部が空爆で破壊されたような有様は、ニュース映像では伝わらない、凄まじい記憶となって頭から離れない。

テレビニュースは中継にしろ、個別被害のリポートにしろ、トリミングされた映像情報しか伝えない。またヘリやドローンの空撮は、広がりを持った映像は提供してくれるが、地上のリアルな破壊状況は分からない。

そこには避難所の匂いや湿度、空気感が存在しないのだ。点や線ではなく、被災の状況を立体的に伝える面的な広がりを持った災害報道が求められるとつくづく感じた。

阪神淡路大震災から東日本大震災まで数々の地震報道に携わってきた石井氏は、翌日の午後、熊本城の石垣が崩落して全壊した熊本神宮の前から、ＭＲＴラジオに生リポートを送った。石井氏は「地震の破壊力のすさまじさ、被災者支援の在り方、いつかは自らも当事者となるという常日頃の意識の重要性」を訴えた。

私には熊本は暗夜行路の只中にあり、人々は絶望感や悲嘆にくれる余裕さえない日々を強いられているように見えた。今後、幾多の災害を克服してきた日本人の辛抱強さや連帯感、相互扶助の心が随

熊本県益城町の被災模様

所で花開くことを心から願いたい。

冒頭に熊本地震に触れたのは、体験や教訓を風化させてはならないという点で、戦争ドキュメンタリーと災害報道には多くの共通項があるし、さらにまた日本人の災害からの復興魂は、71年前に始まった戦災からの復興こそが、その原型となっていると思うからだ。

## ●受賞して考えた事

昨年私はラジオドキュメンタリー『機銃掃射に怯えた日々～昭和20年宮崎の空の下で～』を制作し、平成27年民間放送連盟賞のラジオ報道部門で最優秀賞、平成27年度文化庁芸術祭ラジオ部門で大賞を頂くことができた。

これまでも自ら制作したり、プロデュースした番組が賞をもらったことはあったが、最高賞は初めてだった。

満60歳の定年の年に卒業制作として作った作品が最高賞を受賞できたのは、神様からのご褒美に思えた。日頃から「賞は狙って取れるものではない。いい番組を制作しそれが賞に輝けば本望！」を信条（言い訳？）としていただけに、図らずも社員最後の年にそれを実現することができた。

そこでと言ってはなんだが、この場を借りて「賞」について簡単な考察を加えたい。

局によっては、「賞獲り」に重きを置く社もあるようだが、私は、それは本末転倒で、「賞を取るのは目的ではなく、あくまで目標は質の高い作品を制作すること」だと思う。

結果的にその作品が何らかの賞に輝けば、それを会社やスタッフ・出演者で喜び感謝すればいいのである。受賞は素直にうれしいし励みになる。しかし、言い方としては「賞を取れ！」ではなく「賞が取れるようないい番組を作れ！」が正しいと思う。

こんな当たり前のことを、諸先輩が読者の貴誌に記すのは、受賞しないことで社内的に肩身の狭い思いを抱く優秀な制作者を何人も知っているからだ。

かつて私が受賞した際に言葉を交わした他局の制作者からも「賞によって番組が打ち切りから免れた。」「視聴率が低い！と白い目で見られていたが、受賞によって番組の評価が変わった！」などと聞いたことがある。これはある意味「よかったね」だが、見方を変えれば「いい作品でも社内的に評価されない現実」があることを示している。

この場を借りて、「受賞作品は確かに素晴らしいが、受賞しない作品にもまた素晴らしいものがある」事を改めて強調しておきたい。

## ●番組を作った背景

さて「機銃掃射に怯えた日々」の概略やラジオの特性、さらに私の制作信条等については、昨年、『月刊民放』10月号や『民間放送』（2月3日付）にも寄稿させていただいたので詳述は避け、ここでは作品制作の過程をご紹介したい。

まず番組化の発端は、昨年度の連盟賞にラジオ報道部門で参加する作品はないか？とラジオ局から相談を受けたことに始まる。

ＭＲＴでは２０１４年８月から翌年の８月まで、夕方ニュースで「戦後70年・証言　戦争の記憶」を放送した。この企画は、宮崎県内の戦争体験談やＭＲＴが独自取材した太平洋戦争秘話を１年間に渡って放送したものだが、その中に機銃掃射の体験が何本もあった。

◆このうち宮崎県串間市の百野達さん（87）は、昭和20年3月18日、当時の志布志線日向北方駅付近（現在の串間市）で蒸気機関車に機関助手として乗車中、米軍機7機に襲われた。7機は百野さんが乗った機関車を執拗に何度も銃撃した。幸い運転席に弾は当たらず、百野さんは助かったが、後方の客車では大惨事が起きていた。「満員の客車は血の海。車掌も重傷。私は必死でけが人の血を拭い運び出した。何人亡くなったのかはわからない。」と語る。

機関車に乗車して機銃掃射を受けた百野さん

さらに昭和20年7月17日現在の宮崎市内海（うちうみ）では、当時の国民学校2年生だった大澤ヒロ子さん（80）が機銃掃射に襲

われた。内海には人間魚雷「回天」の基地や造船所があった。「叔母達の後を追って私も倉庫に逃げ込んだ。その時、『ヒロ子ちゃんケガしている』と誰かに言われて右腕を見ると、弾が貫通していた。先生が来て向こうを向けと言われ、肘と手首の間で切断された。戦後は左手だけで書道やそろばんを覚え、子供2人を育て上げたが、子供達には、死ぬまでお母さんの戦争は終わらないと話しています。」と語る。

宮崎市の機銃掃射で
右腕を失った大澤ヒロ子さん

また番組化にあたっては、TBSテレビが2015年3月に放送した「千の証言スペシャル・私の街も戦場だった」の制作にMRTも協力し、県内の機銃掃射体験者をリサーチしていたことも役立った。

この番組は、大分県宇佐市の市民団体「豊の国・宇佐市塾」の皆さんが発掘した米軍機による国内の機銃掃射映像を基に作られたドキュメンタリー&ドラマで、発掘された映像の中に宮崎県内を襲う米軍機のガンカメラ映像がいくつも含まれていた。私達は、ローカル用に映像を基に現場を特定し、当時を知る方々を探し出していた。

以上のような経過を踏まえて、私は、機銃掃射被害の実態なら番組化できると判断し、ほぼその日のうちに企画書を書いた。

以前から戦争ドキュメンタリーは制作してきたが、宮崎には東京大空襲や原爆、沖縄戦といった全国にも知られる大きなテーマがなくその設定が中々難しい。

宮崎県の出征兵士の戦死は、2万7千人。それぞれの死は確かに重いテーマだが、番組化を考えると証言者探しやロケの可能性など課題が山積みされるのだ。

今回「機銃掃射」をテーマに番組化するに当たっては、全国各地に機銃掃射による被害がありながら、その実態については正確な資料がないということがすぐに判明した。ならば宮崎について分かる範囲でその実態を詳しく紹介すれば、当時の国民の共通体験という大テーマとしても成り立つのではないか？と考えた。制作には台本作成1週間、編集に1週間、手直しに1週間をかけた。

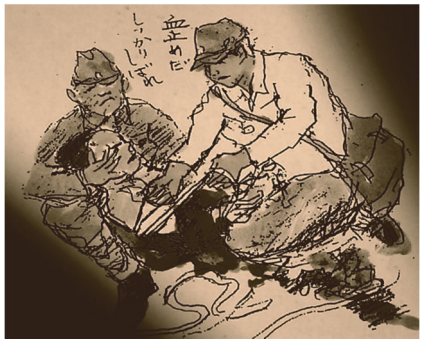
## ●制作手法

番組では昭和20年3月17日から終戦直前の8月10日まで続いた宮崎に対する機銃掃射による被害の実態を県内8カ所14人の証言で浮き彫りにしている。

番組化にあたっては、記者とディレクター5人が取材した素材を私がもう一度チェックして再構成した。報道部映像デスクの後藤友彰が白素材をすべて保存していてくれたのが役に立った。

グラマン・ヘルキャット

◆「突然だだだだーと機関銃の音がしました。『逃げなさい！』と大声で叫ぶと元気のよい生徒は、教室を飛び出して近くの杉林の中に隠れました。爆音がしなくなって机から這い出し廊下に出ました。2階から1階へ向かうと踊り場で高等2年の富田速男君が血まみれで倒れていました。即死でした。富田君は伝令として『逃げろ！』と下級生に指示しながら走っている時に胸を撃たれたのです。高等1年の島田光代さんはお腹を撃たれて即死でした。血が教室中に広がっていました。見るも無残な悲惨な状態でした。」




島之浦の国民学校の悲劇（生徒4人死亡）の文集の挿絵・血まみれの男児

これは宮崎県北部の小さな島、島之浦（現材は延岡市）の国民学校で亡くなった4人の子供たちを悼む文集に寄せられた当時の女性教諭の手記である。

目の前で肉親や友人を失った体験談は、どれも痛ましく、戦争の悲惨が胸を抉る。

編集は、当時の映像部長、矢野孝光が音声編集ソフトをインストールした自らのデスクパソコンで行った。私はオープンリールテープで編集した最期の世代。自分の机で編集する矢野を見て時代は変わった！と実感した。私といえば15年前まで「ここだ！」と思った箇所にマークを入れ、そこでテープを斜め切りして繋ぎ合わせていたのだから。

## ●伝えたかったこと

作品には、米軍の作戦意図と昭和20年の全国の空襲被害の実態を月別に調べて付け加え、原爆以外に少なくとも25万人以上が犠牲になったことを明らかにした。

もともと全国の空襲犠牲者の正確な数は今もって不明だ。当事者に記憶はあるが戦争末期の混乱の中で、自治体にも正しい記録は残っていない。逆に言えば、当時はそれ所ではない混乱の中に日本があったということだろう。もはやその実態を掴む余裕さえなかったのだと思う。

兵士の戦死数は、国や遺族、戦友会などによってほぼ把握されているが、国家そのものを構成する国民の死者は把握されていないこの現実こそが、あの戦争の実態をよく表していると思う。

私は、それを「軍部が終戦の決断をできないでいる間、国民は機銃掃射の刃の前に置き去りにされていた」と番組の中で表現した。「何のための戦争なのか？」この時期の日本はその根本を忘れていたように私には思える。

日本は、昭和19年7月のサイパン島玉砕を経て、台湾沖航空戦で大打撃を受けながら戦果を誤認したまま、10月のフィリピン戦に突入した。その前に終戦に大きく舵を切りさえすれば１００万人以上の命を救えたのではないだろうか。

サイパン陥落の責任をとって東條内閣が退陣し、その後の内閣に戦争終結の思いはありながら、陸海軍の思惑の違いや大本営の思い上がり、昭和天皇側近の重臣達の英断のなさが、国民の屍を累々と積み上げる悲劇を生んだのだ。

国家権力とはそういうものだということを忘れてはならない、とつくづく思う。

番組では、当時のそんな日本に暮らし、戦争の悲劇を体験したご高齢の方々が、自らの体験を切々と語り、平和の尊さを訴えた。その言葉こそが忘れられない、

◆爆音に驚いて弟の手を引いて表に飛び出したところを機銃掃射に襲われた都城市の坂口フミ子さん83歳は「私は指を失い、当時5歳の弟は、お尻に花が咲いたように肉が飛び出して死んでいた。今でも片時も忘れたことはない。戦争は嫌！絶対」と語り、当時の山之口町国民学校の生徒だった下西一郎さん82歳は、「楠木の大木に隠れて難を逃れたが、校舎では駐留していた兵隊さんが身体を撃ち貫かれて死んだ。こういう時代を２度と繰り返さないようにしましょう。平和こそ尊いのです」と母校の子供たちに語りかけた。

機銃掃射の弾に当たりながら
助かった腹部の傷跡

こうした体験こそ、忘れてはならない戦争の現実であり、戦後の原点なのだと思う。

## ●私的メディア論

ここで私的メディア論を少々。

戦時中メディアは国威発揚と必勝を訴え、軍部の宣伝機関となっていた。そうならないことを戦後肝に銘じたはずのメディアだが、現在の在り様はどうだろうか？こんなことを書くのは私が地方局を志した頃と今の状況の違いを最近よく感じるからだ。

私は１９７８年（昭和53年）４月にＭＲＴに入社した。当時は、放送局の枠を飛び出したテレビマンユニオンが数々の先駆的な番組を作り、アメリカではテッド・ターナーによるＣＮＮ開局の動きが出て、「テレビが変わる！」を肌で感じていた時代だった。

報道番組やドラマ、娯楽番組にも勢いがあった。

マスコミは、第３の権力と呼ばれ、既成権力と対峙した。権力の

監視機関である役割は今も変わらないと思うが、それに従事する人間の心意気のようなものが変質したように思えるのは私だけだろうか？

事実を積み上げて真実を伝える、ジャーナリズムの基本は今も変わっていないはずだが、コメンテーター陣が分かり切った解説や私論としか思えない極端な意見を得意げに披露しているのを見ると「それは違う！」と思う事がしばしばだ。

民放にありながら、年齢からかNHKの『ラジオ深夜便』を聞くことが多い私だが、先日ニュースでよく知られるアンカーの方が「メディアの役割は、権力の中の巨悪を暴くことだと私は思っています。」と静かに語っていらした。「その通り！」と私は拍手を送った。

パナマファイルというすこぶるジャーナリスティックなネタも飛び出してきた昨今、第一線で活躍する若い人達には報道に携わる気概とやる気だけは、忘れないで欲しいと心から願う。その為には権力に対しては常に懐疑的スタンスを忘れない反骨の精神も必要だろう。反骨はジャーナリズムの永遠のバックボーンなのだから。

**●戦争体験者取材の最後の時**

さて諸先輩を前に長々と拙文を連ねてしまったが、最後に、今後の事を。

◆私が戦争番組に拘るのは、戦争経験者の貴重な体験を直に聞ける最後の時代を迎えているからだ。

受賞作品は10人以上の生存者の証言で構成しているが、それが可能だったのは、体験当時、皆さんの多くが国民学校の児童生徒であったからだ。実際に戦場に赴いた兵士の現在の年齢は、80代後半以上。多くが90代だ。戦後80年となる10年後には、その多くは亡くなっているだろう。今、彼らを取材しなければ生きた体験談は将来に残せないのだ。

その一方で、放送の現場では、「戦争物は視聴率が取れない」と、8月の終戦企画でも扱わない局もあるとも聞き、気掛かりでならない。「伝えるべきは伝える」が報道の原則であるはずなのだが。

災害も戦争も番組を作り続けなければ、記憶の伝承は図れない。戦争とは何だったのかを掘り下げる番組制作をこれからも怠らず、あの戦争を自らの問題と捉えた説得力ある作品を作り続けていきたい。

その一つに「あの戦争がなぜ始まったのかを描く番組」がある。国民がこぞってアメリカとの戦争に賛同していった背景を描きたい。

昭和12年県民による祖国振興隊結成、昭和14年ヒットラーユーゲント(ナチスの青年組織)来県、昭和15年(紀元２６００年)「八紘一宇の塔」完成。そんなふるさとの歴史に日本が戦争に突入する歩みを重ね、国民から見た戦争突入までの日本を描きたい。

こんな企画を立てるといつも課題となるのが太平洋戦争に至る日米双方の真の思惑だが、年末から年明けにかけて読んだ２つの書籍が大いに参考になったのでご紹介させていただきたい。

一つは、大河小説『徳川家康』で知られる作家・山岡荘八の『小説太平洋戦争』(講談社文庫全６巻)。この第一巻では太平洋戦争に至るまでの国内政治の苦悩と優柔不断さ、陸海軍の反目、アメリカの日本観を、もともと従軍記者だった山岡氏が、丹念に描いている。

もう一冊は映画プラトーンの監督オリバーストーンの『オリバーストーンが語るもう一つのアメリカ史１』(早川書房)。こちらは戦前から太平洋戦争に至るアメリカの日本に対する本音が見事に描かれている。

この２作品を参考にすれば、日米双方の視点でかなり実像に近い歴史の真実を理解できると思う。

**●終わりに**

さて、今年も民間放送連盟賞の時期（毎年５月までに放送した作品が対象）を迎え、私は報道部とテレビ制作部の３作品の制作を手助けした。若手の持ち味と主体性を活かしながら、作品をブラッシュアップして完成度を上げるのが私の役目だが、若い人達と意見を交わして一つの作品を仕上げるのはいつも大変だが、楽しい作業だ。

宮崎には「庭の山椒の木 鳴る鈴かけて」の歌い出しで始まる椎葉村の民謡『ひえつき節』がある。若いスタッフと共に「小粒でもピリリと辛い山椒の実のような心意気ある番組」をこれからも故郷の地から、発信していきたい。

**【資料提供】ＭＲＴ　宮崎放送**